

日本カメラ博物館 JCII ライブラリー
学芸員 宮崎真二

伊藤逸平 (1912-1992) は、1936年に日本大学専門部文科文学芸術専攻映画部門（後の芸術学部映画学科）を卒業後、1941年に玄光社へ入り写真関連の単行本編集などに携わります。1944年には『写真文化』（アルス）の編集長となり、戦中、終戦直後の混乱期に『写真科学』、『CAMERA』と改題を重ねながら、日本で唯一となった写真雑誌を苦心して刊行し続け、1946年には同誌で「編集者の抗議」を記しました。同年にイヴニングスター社の編集局長に就任して、漫画風刺雑誌『VAN』や、科学雑誌『ポピュラサイエンス』（日本語版）、写真雑誌『カメラファン』などの刊行に携わり、1953年に退社した後は漫画評論、社会評論、小説、シナリオなどの分野で活動したほか、日本リアリズム写真集団の活動にも携わりました。



『世界の写真史』

写真関連の活動としては、1950年代後半から60年代前半にかけて、写真雑誌各誌にて写真展評、掲載作品評などを執筆したほか、『日本カメラ』では1973～74年にかけて作家紹介および写真家との対談連載を行っています。

1967年には写真史家のゲルンシャイム（Gernsheim）夫妻が著した『A concise history of PHOTOGRAPHY』の和訳を担当し、『世界の写真史』（美術出版社）として刊行しました。本書の写真掲載頁は原書と同じく、西ドイツで印刷後に日本語を加刷する形で作成されました。このため翻訳に際しては文字数が厳密に定められ、伊藤は「甚だ頭の痛い作業となった」（あとがき）と述べています。

1975年には朝日ソノラマから『日本写真発達史』を刊行しました。本書は小西六写真工業（現：ユニカミノルタ）の愛用者クラブ会報『さくらファミリー』の連載を基にしたものです。写真前史および日本への渡来からはじまる全11章は、逐次年表的な構成を避けて、社会的状況や政治的情勢など幅広い分野を背景に、写真分野における出来事、エピソードを豊富に記述しています。また鹿島清兵衛とユジェヌ・アジェ、エドワード・ウェストンとエーリッヒ・ザロモン、中山岩太と安井仲治など、同時代の写真家を対比させた書き方が特徴的です。最終章では「今日の写真家」として、森山大道、荒木経惟、内藤正敏、渡辺克己を紹介しているほか、「ある写真家の生涯／木村伊兵衛小伝」を記しています。

また、伊藤はヌード写真についての研究もライフワークとしており、関連写真集の監修や『日本ヌード写真史』（朝日ソノラマ・1977年）を執筆しています。内外を問わず資料文献が皆無に近いテーマであったことから、美学、風俗の観点よりもプロ作家論を中心として時代的に序列するスタイルを取ったあたりに、パイオニアとしての苦心が見られます。



『日本写真発達史』